

# 論壇時評

中嶋嶺雄

上

中嶋根首相が訪米し、日米関係が一段落ついたにもかかわらず、では先般の日米首脳会議で日米双方は本音で理解し合えるようになったのだろうか、という疑惑が沈黙していた。

## 本音で語る日米関係

▲京極純一・村上泰亮・古森義久の共同討議など  
森永和彦「石油産油国の凋落」など▼

### 『逆オイルショック』論議盛ん

## 文化



樹田 達雄・画

独経済を再興できるか」をめぐり、「朝日ジャーナル」(三月十八日号)にはウィリー・クラウス(西独ルーヴル大学教授)と和田俊との対談「西ドイツの選挙分析」と、緑の党指導者ベトラ・ケリー女史への緊急インタビューがある。

『大筋において健全な判断力』と高坂氏  
西ドイツの総選挙は、コ

ボンに在住する仲井城は、「緑の革命」(世界)で、緑の党の進出の背景を描写し、「西ドイツの総選挙が示したものの」(エコノミスト)三月二十九日号)では、保守、中道連合の勝利の原因を分析している。

保守中道連合政権の勝利、野党の社会民主主義の大敗に終わった半面、環境保護と反核・平和運動をかかげた「緑の党」という「反政党的政党」(ケリー女史)の躍進によって印象づけられた。また、選挙結果に世界の関心が集まっていたのは、いつまでもなく、今日の米ソ新冷戦下での西ドイツの選択が重要な国際的意味をもっていたからである。

### 原油値下げによる世界経済への影響

国際問題では、なんといつても今月は、石油価格引き下げによるいわゆる「逆オイルショック」に議論が集中していた。森永和彦「石油産油国の凋落」(自由)は、石油危機以来のOPEC諸国の栄枯盛衰を「おられる者久しからず」だと見做し、一方、中道連合「逆オイルショックの波」(経済往来)は、「第三次石油ショック発生の可能性は、逆石油ショック下の将来に対する根拠なき希望の観測の中で着々と進行している」と警鐘を鳴らしている。

### ソ連月刊誌が井上靖「闘牛」など紹介

ソ連の月刊誌「外国文学」の誌の「外国文学」が、長編を主体にしているところから、中、短編の紹介のため昨年から始められたもので、七十九国の代表作の作品紹介を予定。その第一冊が井上靖の作品集「闘牛」だ。訳者は赤リスだったわけで、「日本文学愛好家である私にはとてもうれし」とニコライ・フェドレンコ。

原油値下げの効果は必ずしも月(二十一日号)ととも、参照すべきであろう。

なお、今月よりマクロな世界経済の展望に転じて、高崎格(世界)と村上泰亮「世界経済の何が転換しつつあるのか」(中央公論)という二編の力作があったことのみを、(二)では指摘しておきたい。(東大教授・国際関係論) 講談社出版文化賞決まる

第十四回講談社出版文化賞は、このほぐの通り決まりました。賞金は各三万円。贈呈式は五月十二日東京・紀尾井町のホテルニューオータニ。【さしえ賞】須田利太郎司